

Year-in-Japanプログラムにおけるオンライン授業の実践

-オンライン授業への移行過程から今後の展望まで-

谷川依津江

甲南大学 国際交流センター

神戸市東灘区岡本 8-9-1, 658-8501

概要

新型コロナウイルスによる影響で、甲南大学短期留学日本語プログラムは学期途中でのオンライン授業への移行を余儀なくされた。ウェブコミュニケーションシステム等、ICTの利用によって対面授業時のカリキュラムを大幅に変更することなく、そのままの形でオンライン授業へと引き継ぐことができたが、様々な課題もあった。オンライン授業の実施内容をその利点と課題について整理し、明らかになった課題から①LMSの活用の必要性、②オンライン授業における会話の不自然さの理由、③学習成果の分類を用いた評価方法の見直しについて述べる。

キーワード: オンライン授業, 利点と課題, LMSの活用, 会話の不自然さ, 学習成果と評価方法

1 はじめに

本稿では、甲南大学短期留学日本語プログラム Year-in-Japan program (以後 YiJプログラム) における 2020 年春学期の日本語オンライン授業の実践について報告する。1月に春学期が始まった YiJ プログラムは、3月中旬の研修旅行が中止となり、3月の下旬に学期途中で、オンライン授業へと移行することになった。本稿では、まずオンライン授業への移行の経緯を説明し、次に LMS の導入、授業内活動・宿題、試験を含む評価方法、その他(広島への研修旅行、修了式)における取り組みを振り返り、そこから明らかになった課題について言及する。最後に、オンライン授業でも実施が可能であったこと、オンラインへの移行が困難であったことを整理し、課題から見えてきた今後の展望について述べる。

2 オンライン授業への移行

甲南大学の YiJ プログラムは、主に海外の協定大学で日本語を学ぶ学生を半年～1年の期間で受け入れており、学生たちは午前中に日本語を、午後からは Japan Studies と呼ばれる専門科目を勉強する。2020年の春学期は1月に開始し、2019年9月から YiJ プログラムで学んでいた学生に(うち2名は秋学期のみで帰国した)新たに10名の学生が加わり、30名の学生が初級後半レベルのクラス2から上級レベルのクラス5までに在籍していた。2月には能楽ワークショップが行われ、3月18～19日に予定されていた広島研修旅行に向け、動画による学習ソーシャルプラ

ットフォーム（Flipgrid）で広島のア田女子大学の学生との交流を始めていたが、新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延を受け、広島への研修旅行が2月末に中止となった（表1参照）。また協定大学の留学プログラム中止の決定に伴い、2月末に5名の学生が緊急帰国を余儀なくされた。

表1 春学期のスケジュール変更

| <変更前> | | <変更後> | |
|----------------------|-----------------------------|----------------------|-----------------------------|
| 1月14日（火） | 春学期授業開始、日本語コースオリエンテーション | 1月14日（火） | 春学期授業開始、日本語コースオリエンテーション |
| 1月15日（水）～ 22日（水） | 日本語クラス変更希望申し出可能期間（見学可能） | 1月15日（水）～ 22日（水） | 日本語クラス変更希望申し出可能期間（見学可能） |
| 1月30日（木） | 日本語クラス変更希望申し出の〆切 | 1月30日（木） | 日本語クラス変更希望申し出の〆切 |
| 1月31日（金）～ 2月5日（水） | 甲南大学入学試験のため休講 | 1月31日（金）～ 2月5日（水） | 甲南大学入学試験のため休講 |
| 2月7日（金） | 日本文化体験・能楽ワークショップ | 2月7日（金） | 日本文化体験・能楽ワークショップ |
| 3月2日（月）～ 4日（水） | 中間試験期間 | 3月2日（月）～ 4日（水） | 中間試験期間 |
| 3月5日（木） | 甲南大学入学試験のため休講 | 3月5日（木） | 甲南大学入学試験のため休講 |
| 3月18日（水）～ 19日（木） | 日本語研修旅行<広島・宮島> | 3月18日（水） | 安田女子大学生の広島弁講座（オンライン） |
| 4月21日（火） | プレゼンテーション大会 | 3月19日（木） | 岡本散策 |
| 4月27日（月）、 28日（火） | 期末試験 | 3月25日（水）～ 26日（木） | オンライン授業移行準備のため休講 |
| 4月30日（木）～ | 春休み休講 | 3月27日（金） | オンライン授業開始 |
| 5月1日（金） | | 4月28日（火） | 期末試験（オンライン） |
| 5月7日（木）、 8日（金） | 期末試験 | 4月30日（木）、 | 春休み |
| 5月11日（月）～ 12日（火） | プログラム終了前プロフィシエンシーテスト（筆記・口頭） | 5月1日（金） | |
| 5月13日（水） | フェアウェルパーティー準備 | 5月7日（木）、 8日（金） | 期末試験（オンライン） |
| 5月14日（木） | 日本語授業補講日 | 5月11日（月）、 12日（火） | プログラム終了前プロフィシエンシーテスト（オンライン） |
| 5月15日（金） | 修了式 | 5月13日（水） | YiJクイズ大会（オンライン） |
| | | 5月14日（木） | 日本語授業補講日 |
| | | 5月15日（金） | 修了式（オンライン） |

その後3月にも協定大学からの帰国命令や、自主的な判断によって学生が徐々に帰国することになった。兵庫県下のコロナウイルス感染者数急増に伴い、それまで検討されていた授業のオンラインへの移行が決定され、3月24日に学生たちに授業がオンラインに移行することが伝えられた。

オンライン授業への移行にあたり、対面授業のカリキュラムを大幅に変更せず、同期型の授業を継続することになった。同期型授業にウェブコミュニケーションシステムのZoomを用いることとなったが、初めてZoomを使う教師もいたため、移行準備期間に日本語を担当する教師同士でZoomの基本的な使い方の確認・練習を行った。学生とも可能な範囲で接続確認等を行い、25、26日の準備期間を経て、3月27日より日本語クラス2～5は完全にオンラインへと移行した。

参加学生の数は表2の通りである。結果として22名の学生が無事に春学期を修了し、単位を取得することができた。

表2 参加学生数

| 春学期 | 開始時 | 終了時 |
|------|-----|-----|
| クラス2 | 4 | 4 |
| クラス3 | 10 | 5 |
| クラス4 | 11 | 11 |
| クラス5 | 5 | 2 |
| 合計 | 30 | 22 |

3 取り組みと課題

ここではLMSの導入、授業内活動・宿題、試験を含む評価方法、その他のオンライン活動（広島の学生との交流、修了式）における取り組みについて実施した内容と、実施した際の利点と課題について述べていく。

3.1 Learning Management Systemの導入

YiJプログラムで来日する留学生には甲南大学のメールアドレスが付与され、学内Wi-Fiの利用や、国際交流センター事務室からの一斉連絡が行えるようにはなっているが、甲南大学のLearning Management System（以下、LMS）であるMy Konanへの紐づけがされておらず、オンライン移行時に別途LMSを用意することを検討した。2月末以降日本を離れる学生が増えていたこと、またその時点で日本に残っていた学生も所属大学からいつ帰国指示が出るか分からない状態にあったため、学生のメールの送受信量が通常時より増えているであろうと思われる。そのような状況下で、日本語の授業に関する連絡をメールでやりとりすることは効率的ではないと判断し、無料利用が可能なLMSが必要であると考えた。

YiJプログラムで学ぶ学生の中には、初級～初中級レベルの学生も含まれており、正確に情報伝達を行うためには日本語のみでなく英語での利用も可能なもの、またセキュリティー面そして移行期間が2日しかないことを考慮し、登録が簡単で安全な学習環境が確保できること、そして学生が用いるデバイスがパソコンだけでなく、タブレットやスマートフォンも含まれることから、どのようなデバイスでも利用可能なものであることが、LMSの利用条件であった。いくつかの候補の中から、上に挙げた条件を満たすEdmodoという教育プラットフォームを日本語2、4、5のクラスで導入することとした。Edmodoはメールアドレスの登録が必須ではなく、担当教師が学生に招待メールを送ることで登録が可能になるため、すでに帰国してしまっていた学生の登録もスムーズに行うことができた。またYiJプログラムの日本語クラスは1つのクラスを複数の教師で担当するチームティーチングの形式をとっているのだが、Edmodoには複数の教師を「担任」として登録することが可能で、「担任」として登録されている教師はEdmodo上で学生の宿題の提出状況や小テストの点数等を自由に確認することができるため、学生の学習状況をチーム内で容易に共有することができた。さらにEdmodoで教師間の連絡や配付資料の共有ができたことも、対面でのコミュニケーションができなくなった状況において大きな助けとなった。

学生とのやりとりもEdmodoで行うことで、メールを使わずに授業内容や日々の様子などについても学生とコミュニケーションをとることができ、一日の受診メール件数が多い緊急時においても学生からの連絡を見落とすことなく、即時の対応が可能であった。また学生にとっても

Edmodoで宿題を提出する際について質問をしたり、自分の現状を伝えたりでき、通常授業であれば授業の前後の短い会話で話すような、メールを書くほどでもないかもしれないと躊躇してしまいがちな内容も、教師と共有しやすかったのではないだろうか。実際、宿題提出時に「宿題が難しかった」や「アルバイトの面接に行くことになりそうだ」など、短いコメントが学生から送られてきており、授業内では把握しきれない学生の状況を知る機会になった。

授業は基本的に対面授業の内容をそのままZoomを用いた同期型授業に引き継ぐ形で行ったが、ヨーロッパに帰国した学生は、時差の問題で日本時間午前9時開始の授業に出席することは不可能だった。そのため日本時間午前9時からの授業は日本にまだ残っていた学生、そしてアメリカ本土とハワイに帰国した学生向けとし、それを録画したものをEdmodoでヨーロッパの学生と共有した上で、ヨーロッパの午前中（日本の夕方）にヨーロッパの学生向けの口頭練習や質疑応答を中心とした授業を別途行うこととした。この授業動画の共有や、同期型授業のZoomのリンクの共有などにも、Edmodoを利用した。授業動画やZoomのリンクをEdmodo上で一括管理することで、利便性が上がるだけでなく、セキュリティ面においてもリンクの不用意な拡散を招くリスクを避けることができた。またインターネットの接続状況や学生の使用デバイスの影響等で授業の続行に支障をきたした場合などにも、Edmodo上で学生とも他の教師とも問題を共有し、後ほど動画や他の教材等で補足ができるというのは、教師にとっても心理的なプレッシャーを軽減することに繋がったと思われる。

その他、Googleフォームで作成したクイズ（会話・発話、漢字、語彙、文法等の小テスト）や単元テスト・期末試験を学生と共有する際に、リンクの共有時間を予め設定して、自動で公開できる機能を用いることで、試験の公平性をある程度保つことができた。

甲南大学のLMSであるMy Konanは、留学生にとって利用できる内容が限定されているため利用が許可されておらず、これまで特に利用していなかったが、今回オンライン授業への移行に伴いその重要性を痛感した。

3.2 授業内の活動及び宿題

今回のオンライン授業への移行は1月から開始していた学期の途中で行われたため、プログラム参加学生はすでに教科書や付属するCD、またワークブック等の副教材を所持している状態で帰国した。これは著作権の問題を考えると幸いなことであった。しかしそれでもパワーポイントなど、Zoom上で共有できる形の教材を準備するなど、通常の授業とは異なる授業準備が必要であった。

オンライン授業において大きな課題となったのは、初級～初中級レベルの漢字の授業であった。通常の対面授業の場合、初級の漢字クラスでは多くの学生が漢字を書くことに慣れていないため、教師が教室内で新出漢字の筆順を示した後、学生にも漢字を書かせ、正確にバランスよく書けているかを、その場で教師が確認して授業を進めていくことが多い。しかしオンライン授業では、実際に学生が漢字を書く様子を見て、漢字の書き方や形が正しく認識できているかを確認することができず、授業後に宿題として学生が書いた漢字を写真撮影したものを見ることでしか確認することができなかった。Zoomのホワイトボード機能を使って、授業中に学生に漢字を書いてもらう方法も試したが、学生が使用しているデバイスによってはホワイトボード機能が上手く使えなかったり、インターネットの接続状況によっては難しいこともあったりで、あまり有効な方法とはならなかった。特に初級レベルの漢字クラスでは、漢字を書く様子が確認できるようカメラの設置位置を変えるなど、ハード面での工夫が必要だと思われる。一方、中級～上級の漢字クラ

スは、漢字の書き方を覚えるというよりは教科書に出てきた漢字熟語の定着や、アカデミックな場面での漢字使用や日本語能力検定を視野に入れた語彙力の向上を目標とするクラスであったため、評価方法についての課題は残るものの授業に関しては比較的スムーズにオンライン授業への移行ができた。

同じように課題となったのが、文型練習や漢字練習などの手で書く作業が含まれる宿題であった。これらの練習は、授業後の宿題として学生が自分のワークブックに書き込んだものを写真に撮り、提出期限までにEdmodoにアップロードするという形にした。これまで日本語教育においては文字（特に漢字）を手で書くことを重視した課題やテストなどが多く、対面授業の際には作文用紙やレポート用紙を配付して手書きで取り組むこともあった作文やスピーチ原稿は、オンライン授業への移行後は主にパソコンで作成し提出することになったため、ワークブック等の宿題が唯一日本語を書く機会となった学生が多かった。手で文字を書くという活動も重要であると思うが、現代の学生の日本語使用環境を考えると、通常時であっても手書きする機会はあまりないことから、今後はオンラインの授業であるか否かに関わらず、学生の日本語使用環境やニーズに応じて、どの程度「手で文字を書く」課題やテストを取り入れるのか、またなぜ「正しく文字が書けるか」を評価するのかという評価の理由を示す必要があると考えるきっかけになった。

また言語の授業には不可欠である会話練習も、オンライン授業では課題となった。Zoomの機能上、複数名が同時に発話した場合には、先に発話した者の声のみをマイクが認識し、他の発話者の声は聞こえなくなるという点が、言語の授業においては問題となった。通常の対面授業であれば教室内の学生全員が一斉にペアで会話練習を始めても、教師は教室を歩き回るなどして、各ペアの会話の様子をモニターすることが可能である。しかしZoomでは一度に一人の声しか聞こえないため、一組ずつ発話させるしか手段がなく、他の学生はその様子を見ながら自分たちの機会を待つことになってしまう。春学期の初級クラスは学生が4人のみで、一組ずつ発話練習をさせてもそれほど長い時間を必要としなかったため問題なかったが、学生の人数が多くなるとこの点は改善の必要性が出てくるだろう。このような問題を解消するために、Zoomのブレイクアウト機能を使って学生同士をオンライン上の個別の部屋に配置し会話練習をさせることもできるが、初級クラスの学生にとっては、教師の介入が全くないところで、日本語のみを用いてコミュニケーションを継続することが困難であり、学生のみでのペアワークが言語習得のための練習にあまり有効ではないと思われる。一方、上級クラスでは、学生を数人のグループに分け、ブレイクアウト機能を用いて話し合いの場を設けることもあった。対面の授業とは異なり、他のグループの声が聞こえないことで自分たちのグループの話し合いや練習に集中できるという良い点がある反面、教師の目が行き届かないため日本語を積極的に使用していないグループもあったと推測される。

さらにオンライン授業内での会話は、通常の対面時の会話と、以下の2点において異質なものになる。一つは、参加者がカメラではなくモニターを見ながら発話するため、会話中に視線が合わないという点である。Kendon (1981) が述べるように、視線には会話参加者のどちらが働きかけを行う順にあるかを制御する会話調整の働きがあり、通常の会話であれば相手の表情や視線などから発話するタイミングを判断するが、オンライン授業ではそれができない。また田上(2008)が指摘するように、授業内において教師は視線によって注意喚起を促したり、理解の確認を行ったり、複数の学生から一人の学生に向けて1対1のコミュニケーションを開始するための非言語情報の発信と受信を行ったりしているが、二次元スクリーン上で教師が学生と視線を一致させることでの以上のようなコミュニケーションのトリガ機能の実現は困難であり、対面時と同等の会

話を再現することは現時点では難しい。二つ目は、上でも述べた複数話者の音声を拾うことができないというZoomの特性から、二人以上が同時に発話した場合に、自動的にどちらか一方の発話を選択されるという点である。通常時の会話では、二人以上が同時に発話した際には、何らかの方法で発話の権利の譲り合いをした後に会話が続けられるが、Zoomの会話ではそのような場面が生じることはない。また会話中のあいづちも「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現」（メイナード 1993：58）と定義されるように、通常の会話では会話の進行を支持、または促進する機能を持っているが、Zoomの会話ではあいづちによって発話が聞こえなくなってしまうなど会話の進行の妨げとなってしまうことが多くあった。対面時のコミュニケーションにおいて発話の機会の取得・譲り合いやあいづちは重要な役割を担っているが、それがオンラインでのコミュニケーションでは機能しないため、オンライン上の会話の進行は通常時のコミュニケーションルールに沿わないものとなる。このような会話は相手に不快感を与える場合があり、不自然だと感じる原因となると考えられる。

3.3 小テスト・試験を含む評価方法の変更

Yijプログラムの通常時の成績配分は以下のように（表3参照）定められている。特に授業への出席が重視されており、80%以上の実質的な出席がないと単位が認定されないという規定がある。しかし2020年春学期に関しては、学生の緊急帰国や帰国準備に伴うやむを得ない欠席、また帰国後の学生のインターネットの接続状況や居住環境に関する問題などがあり、出席したくてもできない状況にある学生が多かったため、出席を成績評価には含まないことになった。これは日本語の授業だけではなく、Yijプログラム全体としての決定であった。その他の成績配分に関しては大幅な変更はなかった。

言語の授業において、授業は知識を獲得する場だけでなく、練習・訓練の場でもあるという考えから授業への出席が重視されているが、この度の評価方法の変更が、成績配分について再考するきっかけとなった。

表3 通常時の成績配分

| | クラス2～4 | クラス5 |
|-----------|--------|------|
| 出席・参加度 | 15% | 15% |
| 宿題 | 15% | 10% |
| クイズ（小テスト） | 20% | 10% |
| 単元テスト | 15% | 15% |
| 中間試験 | 15% | 15% |
| 期末試験 | 20% | 20% |
| 研究レポート | | 15% |

オンライン授業へと移行した3月末の時点で、すでに中間試験は終了していたが、小テスト、単元テスト、期末試験はオンライン授業への移行に伴い、Googleフォームを用いて行うことにした。この中で特に漢字の小テストはGoogleフォームで行うことが難しかった。漢字の読み方を問う問題はGoogleフォームの記述機能を使って作成することができたが、ひらがなから漢字を書かせる問題は記述機能を使って作成すると問題として成立しないため、同じ読み方で異なる漢字の

語や、部首やつくりが似ている漢字の語を選択肢に入れた選択問題という形で出題した。

試験の実施方法については、Zoomで繋いだ状態での筆記試験の実施も検討したが、学生の国や居住地によってインターネットの接続状況が安定していなかったことと、学生が使用しているデバイスによってはZoomとその他のアプリケーションを同時に開くことが不可能であったため、Googleフォームで作成したテストを、Edmodoで設定した時間に自動公開し、定められた時間内に終了するという形で行った。教科書や辞書等は使用せずにテストに取り組むこととしたが、実際にテストに取り組んでいる様子を確認することはできなかったので、不正行為を防ぐことは実質的には不可能であった。そこで単元テストや期末試験では、不正行為が生じやすい語彙や漢字といった言語知識を問う問題よりも、人間関係や状況に応じた応答や質問文を作成するという言語運用能力を問う問題を多くしたり、自分で選んだトピックについてのスピーチを試験に含めたりするなどして対応した。

3.4 その他のオンライン活動

2月末に予定されていた広島研修旅行はキャンセルになったが、なんとか学生たちの交流の機会を設けたいと思い、研修旅行が予定されていた日に、Zoomで安田女子大学の学生とYiJプログラムの学生を繋ぎ、オンライン交流を行った。安田女子大学の学生は、それぞれキャンパスまたは自宅から、YiJプログラムの学生は帰国先や甲南大学のキャンパスから参加した。すでに広島の安田女子大学の学生と、Flipgridという動画による学習プラットフォームを通して非同期型の交流を行っていたため、Zoomでのオンライン交流もスムーズに行うことができた。オンライン交流会では、安田女子大学の学生たちによる広島弁特有の表現を含んだ会話を聞き、その表現の意味を推測するというミニ広島弁講座を開催した。この交流を通して、普段聞きなれている授業内の日本語とも、ホストファミリーや甲南生との会話で耳にする関西方言とも異なる日本語に触れることができた。実際に広島に行くことなく広島の人々と交流できるというのは、ウェブコミュニケーションシステムならではの強みであると言えるだろう。

5月の修了式もZoomを用いてオンラインで開催された。センター長からの祝辞や学生からプログラムスタッフへの謝辞、担当教師による所感、そして学生たちによる1年間の思い出のビデオの共有など、修了証を手渡すことはできなかったが、通常時とほとんど変わらない修了式を行うことができた。

YiJプログラムの大きな特徴として、日本で、日本人のホストファミリーと生活をしながら、日本の大学に通い、日本語を学ぶという環境が挙げられる。しかしコロナウイルスの影響で、学生たちは帰国を余儀なくされ、授業以外で日本語に触れる機会が失われてしまった。しかしウェブコミュニケーションシステムの利用によって、広島の学生との交流や修了式など、授業外の交流の場を少しではあるが確保することができた。新型コロナウイルスの影響でやむを得ず中止しなければならなかったことは多くあったが、ICTの利用によって形を変えて実施することが可能なこともあった。このことが、大きな変化の中でも70%以上の学生が無事にコースを修了できたことに貢献しているのではないだろうか。

4 今後の展望

以上、オンライン授業での実践の利点と残された課題について述べた。ここでは、その課題を

もとにオンライン授業でも実施が可能なことと移行が困難なこと、また今後再考が必要な点を挙げていく。

LMSを利用することで、日本国外の様々な国と地域から授業に参加する学生と、授業のZoomリンクや授業動画、配付資料などを、不用意な拡散の確立を減らし、安全に共有することができた。通常の対面授業の際にも、学生の出席状況や宿題の提出、小テストや試験の結果などは講師室内に保管されている学習記録によって共有できていたが、担当授業日のみ出講する非常勤講師とは、共有の機会が限られていた。LMSによって常に学生の学習状況を確認することができるのは大きな利点である。

またLMSを利用することで教材や配付資料の一元管理が可能となり、学生自身で配付資料を確認することができるため、欠席した場合や紛失した場合にも自分で資料を取得できるという利点があった。さらにLMSで配布資料だけでなく、学生が宿題の提出率や小テスト・試験の結果などを確認し、自身の学習管理が行える。尾崎(2008)や吉田(2009)が述べるように、自己の学習状況が一覧できることは学習の動機づけとなり、自律的な学習者の育成にも役立つだろう。授業改善の取り組みや学習効果の向上を目的としたLMS利用に関する研究も盛んになってきていることも考えると、YiJプログラムでもオンライン授業の実践時のみだけでなく、対面授業の際にも積極的にLMSを活用していく必要があると思われる。

オンライン授業における発話に関する課題については、対面授業と同じような会話を再現しようとするのは教師にとって違和感やプレッシャーとなってしまうことや、学生にとっても発話機会を獲得することが難しくなるであろうことから、オンライン授業においては発話のタイミングの獲得方法やあいづちが、対面時とは異なるということを教師も学生も認識して授業に臨むことが必要なのではないかと思われる。誰かに話しかける際には必ず名前を呼ぶ、発話のタイミングを得るために挙手または何らかの合図をする、またあいづちは声に出さず頭や目の動きなどで表すなど、あらかじめオンライン授業の会話をスムーズにするためのヒントを確認しておくなどの対策をとるのも一案ではないだろうか。

この度のオンライン授業への移行に際し、成績配分や評価方法について多くの課題があった。実技・実習である言語の授業においては、学生のパフォーマンスだけでなく、学習への取り組みの姿勢や態度も「出席」や「参加度」といった形で評価されることが多い。これまでは、その取り組みの姿勢を「時間」を基準にして評価したものを「出席」、授業中の発言や教室内活動の取り組みに見られる「積極性」や「自発性」を基準に評価したものを「参加度」として評価していたと思われる。確かに出席率は数値で表すことができ、成績評価の客観的根拠として示すことができるが、宿題の提出や小テストなどで、学生の出席率を十分に加味した成績評価ができるのではないだろうか。緊急事態などの外的要因によって授業の形式が学期途中で変更となる可能性を踏まえ、どのような状況でも明瞭な評価ができるよう、学習の姿勢や態度を評価する方法について再考する必要があると思われる。

他にオンライン授業への移行の際に課題となったのは、試験による評価に関するものである。会話力を評価する小テストなどは、学生と個別に時間を設けることで、対面授業の際と同様に行うことができたが、筆記試験に関してはオンラインへの移行が難しいものが多かった。ガニエ(2005)の学習成果の5分類(知的技能、認知的方略、言語情報、態度、運動技能)に従って筆記試験の問題を分類してみると、言語情報(対象に関して知っていること)に分類される知識を、教室という教師の目が届く空間ではなく、学生が個々の空間で受験する試験で問うことに、この方法が適切なのだろうかという疑問があった。これは、時間制限を設けるなど、できるだけ不正

行為を防ぐための手段を講じることはできても、教師が同室しない空間での試験について不正行為が行われていないことを確認する手段がないためである。しかし言語情報に関して教師が評価したいのは、学生がその情報を記憶に蓄えているか否かであることを考えれば、必ずしも一回のテストでそれを判断しなくてもいいのではないだろうか。日本語授業の単語の小テストを例とすると、「英語で書かれた意味を読み、日本語の単語を書く」という形式の一回のテストで、その単語を覚えているかどうかを判断するのではなく、QuizizzやQuizletなどのクイズ形式で単語学習ができるプラットフォームを利用し、定められた期間内に合格点に達することを条件として何度もクイズに挑戦させるのも一つの方法であろう。他にもその単語の意味を他の学生に説明するとしたら、どのように説明するか、またどのような例文を使うかなどを考えさせ、他者に単語の意味の伝達ができるかどうかを観察するのも有効な手段なのではないだろうか。漢字の小テストで問われる学習成果は、漢字の読み方を問う問題や、ひらがなで表記された語に対して適当な漢字を選ぶ問題は言語情報に関する評価であるのに対して、漢字を正しくバランス良く書くというのは、運動技能に関わる評価である。パソコンで文章を書く機会が多い現在の日本語使用の環境や、日本語能力検定における漢字の出題形式（正しい読み方や、漢字で書かれた語彙の意味を選択する）を鑑みると、これまで対面授業で行ってきたひらがなで書かれた語彙を漢字で書くという形式の小テストは、今後授業の目標や目的に合わせて変える必要があるのではないだろうか。オンライン授業での試験の実施により、試験でどのような学習成果を問おうとしているのかを考え、試験を実施する環境に応じて有効な方法を選択するなど、これまでの試験の形式を改めて見直すきっかけとなった。

5 おわりに

2020年春学期は新型コロナウイルスの影響により急遽オンラインで行うこととなったため、対面授業をそのままオンライン授業へと引き継ぐことになった。これ以前にオンライン授業の経験はなく、教師も学生も全員が手探りの状態での実施となり、多くの課題があった。しかし22名の学生が無事にプログラムを修了できたという点では評価できるのではないだろうか。またコース終了後の学生のアンケート調査（22名中20名が回答）によると、70%の学生が日本語力の向上について期待通りだったと答えており、授業に関しても約80%の学生が高く評価するなど、学生の満足度は高かったと言える。また日本語プログラム開始時と終了時に行ったテスト結果も、去年と同程度の得点の上昇が見られたことから、オンライン授業への移行が学習成果に悪影響を及ぼしたということもなかったと思われる。これには突然の帰国で混乱の中にあつた学生たちの学習意欲と協力、国際交流センタースタッフの混乱する学生への丁寧な対応やサポート、また急な変更に対応するための教師陣の尽力が大きく影響している。

しかし今回は、対面授業が途中からオンライン授業へと移行したため、すでに教師と学生間、また学生間の関係性がある程度成立した状態でのスタートであったことを考えると、特殊なケースであり、この取り組みをそのままオンライン授業のカリキュラムとして用いることはできない。ここで見えた課題の解決方法を探り、今後のオンライン授業、また対面授業の改善へと繋げていきたい。

参考文献

尾崎修治, “英語授業でのLMSの利用手法とその効果,” 中部大学教育研究 No. 8, pp.49-53, 2008.

ガニエ, R.M., ウェイジャー, W.W.他, 鈴木克明, 岩崎信 (監訳), インストラクショナルデザインの原理. 北大路書房, 2007. (原著: Gagne, Robert M., Walter W. Wager, Katharine C. Goals, John M. Keller. Principles of Instructional Design Fifth Edition, 2005.)

泉子・K・メイナード, 会話分析. くろしお出版, 1993.

田上博司, “遠隔授業における視線一致の必要性和その問題点 解決のための一手法,” 教育システム情報学会誌 Vol. 25, No. 4, pp. 394-402, 2008.

吉田国子, “LMS(Learning Management System)利用が 動機づけに与える影響,” 東京都市大学 環境情報学部 情報メディアセンタージャーナル 2009.4 第10号, pp.54, 2009.

A. Kendon, “Nonverbal Communication: Interaction and Gesture,” The Hague: Mouton Publisher, 1981.